

トルコにおける伝統音楽の継承と利用

人文社会科学部 文化創生課程 多文化共生コース
対馬萌華

はじめに

オスマン帝国末期から現在のトルコ共和国まで、様々なイデオロギーの変化があったことは歴史学、政治学的な観点からも明らかである。加えて、イデオロギーの根源にある歴史観などは伝統音楽の由来に共通するところがある。国民や文化の理想像が変化していく時代の理解を深めるためにも伝統音楽の継承や利用方法の検討が必要であろう。

オスマン帝国末期からトルコ共和国成立期までのトルコの伝統音楽研究は、日本でも行われ始めているところである。一方、共和人民党政権が終わってからは研究がまだ十分とは言えない。本論文では、トルコ古典音楽、メフテル、メヴレヴィー教団音楽、トルコ民俗音楽の4つを比較対象として、現代のトルコ共和国までの伝統音楽とイデオロギーの関係性を明らかにすることを目標とした。

第一章 オスマン帝国及びトルコ共和国の歴史的背景と音楽

第一章では、本論文で比較検討するオスマン帝国末期からトルコ共和国までの歴史の流れと伝統音楽の由来や構成についてその概略をまとめた。第一節ではオスマン帝国が大きく西洋化した時代として18世紀後半以降の歴史を主に取り上げた。マフムート2世の軍制改革で大きく進展した西洋化はイエニチェリ軍団と共にオスマン帝国伝統の軍楽であるメフテルを廃止するなど、トルコの伝統音楽にも大きな影響を与えたものであった。オスマン帝国の崩壊後、新たに建国されたトルコ共和国では、初代大統領に選出されたムスタファ・ケマルによって、オスマン帝国やイスラームと切り離されたトルコ人というナショナリズムを基にした国家の建設が目指された。世俗主義、トルコ主義を掲げトルコ古典音楽やメヴレヴィー教団音楽の教育施設であったイスラーム神秘主義教団を閉鎖させるなどといった政策が行われた。

1940年代後半からは、ケマルが目指した強力な世俗主義にほころびが見られる時代となり、1950年代から60年代の間には1500のモスクが新設され、1980年代にはこれまでの政教分離に抵触しない範囲でイスラームが正当化されるに至った。2002年11月の総選挙で勝利し単独与党となった公正発展党は親イスラーム的な政党であり、大統領のレジェップ・タイイップ・エルドアンを主導にイスラーム色の強い政策を行っている。

第二節ではまずその前半で、トルコの伝統音楽として取り上げるトルコ古典音楽、メフテル、メヴレヴィー教団音楽、トルコ民俗音楽の成り立ちや特徴について整理した。トルコ古典音楽はオスマン帝国の宮廷で演奏された芸術音楽である。メフテルはオスマン帝国のイ

エニチェリ軍団から構成させるメフテルハーネによって演奏される軍楽のことで、遠征時に兵を鼓舞するためや、敵を威嚇するために使用された音楽である。メヴレヴィー教団音楽とは教団の修行法であるセマー（サマーウ）を行う際に演奏されている音楽のことを言う。トルコ民俗音楽は中央アジア起源であり、外国の影響を受けずトルコ人に最も純粋な音楽表現であると定義されている。

第二節の後半では楽器の編成の比較を行った。トルコ古典音楽、メヴレヴィー教団音楽では弦楽器、リュート属の楽器が使われるものの、メフテルでは一切使われていない。その代わりメフテルでは打楽器が充実し、ズルナ、ナッカーレといった木管楽器、金管楽器も使用される。トルコ民俗音楽はリュート属の他に木管楽器や打楽器とって使用される楽器のジャンルも多い。メヴレヴィー教団の音楽家が宮廷で音楽の師匠になることもあったため、オスマン古典音楽とメヴレヴィー教団音楽には共通点が多く、使われる楽器類からもそれが見て取れる。共通して使用される楽器について見ることで音楽の相互的な関係性が明らかになった。

第二章 伝統音楽の継承

第二章では伝統音楽の継承方法に注目して西洋化前と後のオスマン帝国内の社会や音楽の在り方について考察した。西洋化前のオスマン帝国で音楽継承方法は師匠から弟子に口伝で曲を伝授する稽古が基本であった。楽譜を持たない曲の伝授方法は教養を問わないため、西洋化以前のトルコ音楽は開けた芸術であった。

オスマン帝国では西洋化以前にも独自の楽譜を発明する者たちがいた。アリー・ウフキー、カンテミオール、アブデュルバーキー・ナーシル・デデ、ハンバルスムといった人物たちが楽譜を開発した。ハンバルスムの楽譜はアルメニア教会音楽で広く使われていたこともあって19世紀頃から普及したが、それ以外の楽譜はオスマン帝国内に普及しなかった。

西洋化以前のオスマン帝国内に楽譜が普及しなかったのは、イスラームの口承性と関係があると考えられる。イスラームにはクルアーンを暗唱することができるムクリウという役職がいるように、クルアーンの暗記は一定の地位を保っている。また、イスラームの初等教育機関のマクタブや、大学に相当するマドラサでは記憶に頼る教育方法が行われていた。このように、オスマン帝国のムスリムには暗記、暗唱がごく一般的な行為であったため、音楽でも記憶に頼った伝授方法がとられたと考えられる。

西洋化後は主に宮廷内の音楽機関に西洋音楽がもたらされた。宮廷音楽隊は帝室音楽隊に改変され、西洋音楽の指導者としてイタリアからジュゼッペ・ドニゼッティが招聘された。ドニゼッティによって西洋式軍楽が演奏されるだけではなくポルカやワルツといった音楽ももたらされた。しかし宮廷内の音楽がすべて西洋音楽にとって代わられたわけではなく、トルコ古典音楽を演奏する部隊も残されていた。

西洋の五線譜は帝室音楽隊から受け入れられていった。帝室音楽隊で西洋音楽を学んだ者から伝統音楽を記譜する者もあらわれ、楽譜の印刷出版も行われた。初期に出版された楽

譜はピアノ伴奏付きのトルコ音楽であったが、青年トルコ人革命以降はピアノ伴奏なしの楽譜が音楽組織から盛んに出版された。

西洋譜は一般的に 12 平均律を使っているため、1 オクターブに 12 音を超える音は表現しきれない。したがって、微分音という 1 オクターブに 12 音以上の音階を有するトルコ音楽を五線譜上に書き留めるにはトルコ音楽専用の新たな変化記号が必要になるため、楽譜出版が盛んになった時代には微分音を表記する記号も作り出されていった。

以上、第二章では、西洋の五線譜が導入される前のトルコの伝統音楽と、西洋音楽技術の導入によって変化した音楽の継承方法について考察した。口伝でしか伝わってこなかったトルコの音楽が五線譜に記譜されるという行為は西洋とトルコの融合と言えるだろう。しかし、楽譜の台頭はイスラーム文化が音楽にもたらした「記憶の絶対性」を衰退させるとともに音楽の固定が起これ、トルコ音楽が持つ自由さを狭めたことにつながったと考えられる。

第三章 伝統音楽の利用

第三章では、トルコにおける伝統音楽の政治的な利用方法について焦点を当てた。トルコ共和国成立期ではトルコ国民を創出するための啓蒙の一つとして音楽政策が行われた。社会学者のズィヤ・ギョカルプはギリシャ音楽やオスマン帝国の影響を受けて発展したトルコ古典音楽は病気の状態の音楽であると定義し、トルコの国民的音楽を作り出すためにはトルコ民俗音楽と西洋音楽の融合が不可欠だと主張した。ギョカルプの主張はムスタファ・ケマルが掲げる世俗主義やトルコ主義と相性がよく 1930 年代後半からはトルコ民俗音楽と西洋音楽に重点を置いて音楽政策が行われ、トルコ古典音楽の教育機関であった旋律学校のアラトゥルカ部門は廃止された。

民俗音楽政策においてギョカルプたちが提唱したのはトルコ民俗音楽に西洋音楽が持つ和声を融合させることであった。しかし、実際は独唱や独奏が基本であったトルコ民俗音楽を整備し、同じメロディーを演奏する合唱や合奏といった集団性を伴う技法を持ち込むことによって民俗音楽の固定と保存をはかるものであった。

ラジオではトルコ古典音楽の放送が禁止され、西洋音楽とトルコ民俗音楽が多く流れるようになった。この結果、民衆はアラブ地域の電波を受信しアラブ音楽を聴くようになるという現象が起きた。このように、政府の考える理想的な音楽が音楽家や民衆に素直に受け入れられていたかは疑問が残る。

1940 年代後半からは、これまでの強力な世俗主義に反してイスラームを容認する動きが起こったことからメヴラーナーの追悼祭が再開された時期であったため、メヴレヴィー教団音楽も演奏される機会が増えていった。またメヴレヴィー教団音楽はトルコ古典音楽と関係が深いことから、この二つの音楽は再評価されていった。

メフテルは 1950 年から 1960 年の軍事クーデターまで民主党政権の大統領を務めたジェラルド・バヤルによって再興されているが、2003 年以降の公正発展党政権下でも評価され

ていると考えられる。2015年には現大統領でもあるエルドアンを称賛するような歌詞が付けられたメフテルが作られており、2015年という時期はエルドアンが大統領政府制度の成立を求めている時期であるということが興味深い点として指摘できる。

エルドアンの公正発展党政権下ではトルコ民俗音楽も党の宣伝ソングとして歌詞を変えて使用されている。イスタンブールが2010年に欧州文化首都という事業に選ばれた際にはトルコ古典音楽、宗教音楽、軍楽、民俗音楽の楽譜をインターネット公開するプロジェクトも発足した。

2000年代の傾向として、公正発展党とエルドアンの政治体制は、親イスラーム的な政策が目立つため、ケマリズムの土台の一つであった世俗主義には反しているものの、トルコ主義に関しては否定していない。メフテルや民俗音楽の使用といった点からも、現在エルドアン体制のイデオロギーはオスマン帝国の歴史やイスラームという価値観のもとにありつつ、トルコ主義も踏襲していると言える。この結果、4つの伝統音楽が規制されることもなくトルコ共和国を象徴する音楽として受け入れられていると考えられる。また、2000年代は伝統音楽を演奏する場所や機会が広げられた時代と言える。観光名所や海外でもトルコらしい音楽として演奏されている。

おわりに

本論文ではオスマン帝国の西洋主義政策という上からの変革をきっかけに起こったイデオロギーと音楽の関係性について考察した。オスマン帝国末期から行われた伝統音楽の収集と記譜は西洋音楽とトルコ音楽の融合ともいえるが、その後トルコ共和国で行われる伝統音楽の発展と教育の場であった神秘主義教団の閉鎖や、旋律学校のアラトゥルカ部門の廃止、トルコ古典音楽の放送禁止といった決定から結果的に音楽を守る働きがあったと考えられる。加えて、伝統音楽の利用もトルコ共和国建国から盛んに行われていった。トルコ共和国という国に適するように規制や改変の試みが行われ、政府やトルコという国のイメージ戦略にも使われた。

以上より、オスマン帝国の崩壊から現在のトルコ共和国までの時代の変化に伴うイデオロギーの移り変わりは、伝統的な音楽教育方法とトルコ古典音楽、メフテル、メヴレヴィー教団音楽、トルコ民俗音楽の評価に連動するところがあり、音楽はイデオロギーの象徴として利用されていると結論付けた。